

泉州伝統音楽「南音」について

A Report on 'Nanyin' Music of Quanzhou

皆川 厚一
Minagawa Koichi

はじめに

本調査報告は2010年9月8日から13日にかけて行われた、国際常民文化研究機構共同研究“アジア祭祀芸能の比較研究”泉州調査の結果に基づくものである。

中華人民共和国福建省泉州はいわゆる「海のシルクロード」の起点として栄えたアジアのハブポートであり、マルコポーロもその繁栄を記している。東西交易の仲介者として早くからイスラム教徒が住み始め、中国最古のイスラム寺院、清浄寺が保存されている。日本との歴史的な関係では沖縄（琉球）との人的・文化的交流が現在まで続いている。また東南アジアに目を向ければ、在東南アジアの華僑・華人の多くは泉州出身であることが注目され、特に本調査報告でとりあげる「南音」は、東南アジア各地の閩南語を母語とする泉州移民の文化的アイデンティティとして根強く愛好され、様々なバリエーションをともなって現地に定着している。

これらの文化的な背景をふまえ、現地調査で得られたデータと帰国後検索によって得られた各種資料をもとに、泉州の伝統的古典音楽「南音」について報告したい。

1 「南音」概略

南音は福建省泉州を発祥の地とする伝統的な室内楽である。使用する楽器編成は、琵琶、二弦、三弦、洞簫、拍版（歌手が兼任する）などで構成され、歌われる歌詞には閩南語が用いられる。

「南音」という呼称以外に「南管」「南楽」「弦管」等の呼称がある。「南管」は主に閩南出身者の多い台湾で使用され「南音」は東南アジア地域で使用される。

この音楽の成立年代については研究者の間で種々の議論があるが、確実な契機として指摘できるのは紀元304年の西晋時代の内乱により、中原地方からの大規模な漢民族の移動があったことであるとされる。すなわち中原からの移民は川の沿岸に定住し、彼らによって農耕や紡績の技術がもたらされ、漁業中心であった閩南地域の生活様式がそれによって大きく変化した。これが後に南音を形成発展に必要な条件となった。

その後唐代末までに、泉州では文化芸術の分野で大きな発展がみられた。そこには仏教の影響が大きい。唐代から五代にかけて泉州には多くの寺院が建てられ、経書、民間信仰、演劇などが南音の形成に大きな影響を与えたとされる。南音の歌詞は当時の詩体と同じ文体が多く、仏教音楽と相似する曲も少なくないとされる。

元代では詩を歌う歌曲の形式から、物語を演劇的に歌う形式に発展した。元代の雜劇がこれに大きく影響したとされる。同時に中国北部の楽器がこの頃から南音に吸収されはじめ音楽的な表現力がより豊かになった。

明代に入ると歌曲の形式が確立され作品としての楽曲が多数創作されるようになった。また音楽理論の整備の進み、南音が固

有の音楽として社会に定着した。

その条件として、

- 1) 独自の曲目を持つ
 - 2) 独自の調子と拍子を持つ
 - 3) 独自の演奏形式を形成している
 - 4) 独自の流派と演奏者が存在する
- ということが挙げられる(王2007)。

このように見ると南音は五代に起源し、宋代・元代で発展し、明代で大成されたと考えられる。(写真1)



写真1 南音上演風景

2 「南音」上演鑑賞

2-1 上演演目

2010年9月12日夜に泉州市内の南音藝苑で行われた演奏会。演目は次の通りである(括弧内は演奏時間。付属CD参照)。

- 1) 三更鼓 (12:58)
- 2) 梅花操 (8:48)
- 3) 名月望 (7:31)
- 4) 走馬 (10:14)

2-2 曲目解説

以下の曲目解説は演奏会当夜、曲の合間に行われた鄭国権氏の解説を丸山宏氏が通訳されたものに基づいている。

1) 三更鼓

歌詞の内容：夜更けにある婦人が、遠いところへ戦争に行っている夫を思い出している。もし無事に帰って来たらまた一緒に花見に行きたいと願っている。五百年來伝承されている内容の歌詞である。

歌唱の特徴：鼻濁音(ng)を長く引っ張るように歌うのが特徴。泉州方言(閩南語)以外ではこの発音は無い。女性の感情を表

現する為に必須の発声法である。

2) 梅花操

器楽のみの曲である。典型的な南音の演奏形態であり、梅の花の清らかさと高貴さを器楽で表現している。

3) 望名月

唐代の物語に取材している。非常に文学性の高い歌詞で、外的世界と内的精神の関係が巧妙に描かれている。

4) 走馬

中国の文学や絵画の世界では馬が疾走する有り様を描くことは好んでとりあげられるモチーフであるが、音楽で表現されることは非常に珍しい。当夜の演奏会でこの曲のみ拍版は用いられず、代わりに小型の木魚が使われた。馬の蹄の音を模しているようだ。

以上の楽曲解説以外に「器譜」(楽譜)についての言及があるが、後述の「工尺譜」と関連があるものと思われる。

3 南音の楽器

3-1 南音の楽器分類

南音の演奏に使われる楽器は、二通りの演奏形態に分類される。ひとつは「上四管」今ひとつは「下四管」と呼ばれる。「上四管」は琵琶、洞簫、二弦、三弦、拍板で構成される。室内楽に適した編成である。一方「下四管」は南嗩(嗩吶)を主要旋律楽器とし、琵琶、三弦、二弦、鈴や銅鑼などの鳴りものが加わる。⁽¹⁾

<琵琶 pipa>

南音で使用される琵琶は中国の他の地域で一般的に用いられる琵琶と異なった特徴を持っている。一般的な琵琶は棹を立てて構え、義爪をつけてつま弾くが、南音の琵琶(ゆえに南琶と呼ばれる)は棹を横にして構え、爪は用いず演奏者が自分の指でつま弾く。また胴の表面に三日月型の出音孔

がある。同様の琵琶は敦煌千仏洞の壁画に見られる。また日本の正倉院にも同様の琵琶が保存されており、これによって琵琶の成立は唐代であるという研究者の意見が多い。ゆえに南音の琵琶は他の地域の琵琶よりも古い形態を残しているといわれる。(写真2, 3)

南音の演奏に於いて琵琶は指揮者の役割を果たす。したがって琵琶奏者は南音の音楽と楽曲構成に精通してはならない。これは随唐時代の俗楽である「燕楽」と共通する特徴である。

また南音の楽譜「工尺譜」は琵琶用に作られていて、琵琶の演奏に精通していないと、テンポ、リズム型、旋律型を把握することができない。

南音の演奏では旋律の基幹となる主要な音を弾く。



写真2 南音琵琶



写真3 南音琵琶演奏図

<洞簫 dongxiao>

洞簫は竹の吹奏楽器で、一見すると日本の尺八によく似ていて、長さも一尺八寸(約56センチメートル)である。ゆえに洞簫も別名「尺八」と呼ばれる。指孔は表に5孔、裏に1孔で、歌口は日本尺八とは逆に筒の内側に向けて切られている。(写真4、5)

洞簫は装飾音を多用し、琵琶の旋律を補いながら演奏する。



写真4 洞簫



写真5 洞簫演奏図

<二弦 erxuan>

二弦は、現代中国で使われている二胡や、京劇に用いられる京胡の前身であるといわれる。古代の異民族胡族の楽器であったといわれ、元来馬上で奏する擦弦楽器であった。二胡、京胡が蛇皮を用いるのに対し二弦は木の板を胴に張っている。そのためより穏やかでくすんだような音色が得られる。(写真6, 7)

二弦は南音の演奏では歌の旋律をなぞるように演奏する。

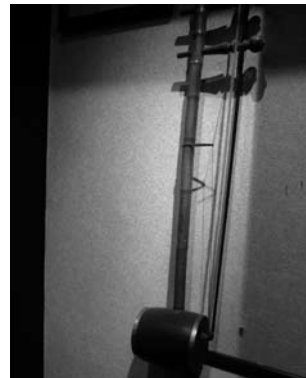


写真6 二弦



写真7 二弦演奏図

<三弦 sanxuan>

三弦は日本の三味線によく似た撥弦楽器で、胴の表面には蛇の皮が張られている。この点では琉球（沖縄）の三線と共通している。中国の三弦は北方系の「大三弦」と南方系の「小三弦」に大別される。南音の三弦は後者に属する。大三弦は北方地域の語り物音楽を中心に演奏される。一方、小三弦は南方地域の語り物や劇音楽に用いられ、歴史的にはより古いと考えられている。（写真8，9）

バチは使用せず、演奏者は自らの指でつま弾く。琵琶と同様、旋律の基幹となる音を弾く。



写真8 三弦



写真9 三弦演奏図

<拍板 paiban>

拍板はライチの木で作られた板状の打楽器で、右手に3枚、左手に2枚を持ち、打ち合わせて演奏する。5枚は紐を通して束になっている。通常は歌唱者がこれを持ち、拍を聞きながら楽曲のテンポをコントロールする。（写真10，11）



写真10 拍板



写真11 拍板演奏図

<南曖 nan-ai>

南曖は嗩吶とも呼ばれ、ダブルリードの吹奏楽器（チャルメラ）である。下四管の演奏形態では旋律の主要楽器である。即ち銅鑼や鈴などの打楽器群を伴う楽曲ではこの南曖が洞簫の代わりに主要旋律楽器となる。（写真12）

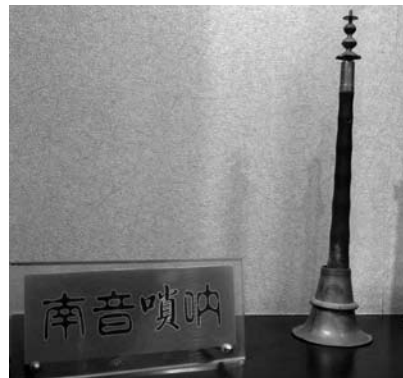


写真12 南曖（嗩吶）

南音藝苑の演奏会では聴くことが出来なかったが、前日9月11日の「梨園戯」の伴奏音楽中で聞かれた。

3- 2 飛天の楽器にみられる南音楽器

泉州市内の仏教寺院、開元寺の大雄宝殿内には南音で使われる楽器を携えた飛天の彫刻像が天井の梁付近に多数見られる。残念ながら撮影には許可が必要であり今回は映像を記録することは出来なかった。

また同じく泉州市内の道教寺院（名称不明）にも南音の楽器を携えた天女の彫刻像が見られた（写真13-16）。開元寺のものに比べると美術的完成度は落ちるものの、南音と地元の民間信仰あるいは寺社との関係を示唆するものとして興味深い。

4 南音の楽式

4-1 楽曲分類

南音の楽曲は“譜”、“指”、“曲”の三種に分類される。

“譜”：歌詞を持たず、琵琶の奏法に従って記譜されている。起承転合（日本の起承転結）の構成を持ち、合奏される器楽曲である。

“指”：歌詞を持ち、楽器によって伴奏される声楽曲。組曲形式になっている。

“曲”：独立した短い声楽曲。

中国音楽研究者、楊桂香に依れば上述の三分類は南音を宮廷音楽として限定する立場の分類であり、民衆音楽としての性格が顕著である南音の現状からすると、この分類に更に“梨園戯”（の音楽）を加えるべきであるとする。実際、調査団が鑑賞した梨園戯の伴奏には“七子班”という名称で南音の楽団が出演し、役者の歌の伴奏なども行っていたので、この主張は考慮に値すると思われる（楊2004）。（写真17）



写真13 天女の洞簫



写真14 天女の琵琶



写真15 天女の二弦



写真16 天女の拍板



写真17 七子班

4-2 南音の楽譜

南音の楽譜は「工尺譜」と呼ばれ“父、工、六、思、一”の文字記号を使用する。即ち五音音階である。これは一般的な中国音楽の記譜に使われる“宮、商、角、徵、羽”の記譜（日本の雅楽でも使用される）とは異なっている。

前述のように南音の楽譜は実質上琵琶の楽譜であり、琵琶の奏法を熟知しないものにはこの工尺譜を読むことは出来ない。

5 南音の伝承と社会的機能

南音は本来民間伝承芸能であり、職業的な演奏家は存在しなかった。中華人民共和国の独立解放後、政府の支援もあり南音の職業的音楽集団が設立されはじめた。

5-1 職業的音楽集団

現在、職業的音楽集団にはアモイ南音楽団と泉州南音楽団がある。

1) アモイ南音楽団

1954年設立。民間の優秀な演奏者と弟子たちを集め結成された。伝統曲の継承、古い楽譜の収集、新曲の作曲などに主な活動である。現在の団員は主として福建芸術学院アモイ分校南音クラスの卒業生である。演奏活動は①国内外の公演②本拠地の定期公演③地域の民俗行事参加④全国の音楽大会への参加、などである。経済面では、団員の基本給、生活補助は政府から支払われ、

その他は楽団自身が賄う。

2) 泉州南音楽団

1960年設立。団員の構成、活動の内容はアモイ南音楽団とほぼ同様である。ただし、泉州は南音の発祥地であるため音楽的レベルが高く、演奏者の層も厚い。また華僑の故郷でもあるため、その海外での移住先への出張演奏が多い。経済面は、基本給、生活補助は政府から支払われるが、その他の費用は華僑からの援助と民間行事への参加報酬であるという。ちなみに調査団が鑑賞した南音はこの団体のメンバーによる演奏であったと思われる。

5-2 南音楽社

職業的音楽集団が発生する以前は、南音の音楽活動は「南音楽社」という団体の集合体によって行われていた。現在も職業的音楽集団とは別に活動が続いている。これらの団体は基本的にアマチュア、ないしは半アマチュアであり、メンバー各自は別に生業をもち、地域の社会文化活動として演奏活動を行う。このメンバーのことを伝統的に「弦友」と呼ぶ。

泉州地域では南音楽社のことを「館閣」と呼ぶ。これは各南音楽社の活動拠点のことである。「館閣」は単なる練習所ではなく、南音と中心とした文化活動の拠点である。

南音楽社は清の時代から泉州各地に存在していた。文化大革命時代に一時活動が停滞したが、1970年代後半から復興活動が始まった。1980年代からは政府が積極的に南音の興隆に力を注ぎ、各地方自治体や小中学校などの教育機関でも南音が取りあげられはじめた。現在南音楽社の数は230団体あまり、7500人ほどの関係者がいる（王2007）。

5-3 伝統的な学習法

南音は伝統的に師匠から弟子へ口頭伝承される音楽である。また楽曲は全て暗譜で演奏される。師匠を“先”、弟子を朗君師弟

“と呼ぶ。活動の場所としては”館閣“と”廟“がある。”館閣“は民間のパトロンから提供された場所であり”廟“は寺社から提供された場所になる。閩南人は仏教、道教、儒教をそれほど厳しく区別せず、従って各宗教施設に南音の活動の場があり、逆に寺社の祭礼の際にはそこで活動する南音団体が奉仕演奏をするといった習慣がある。例えば道教に関しては、霊界と人間界を媒介する”霊媒“である”翁姨“を招くための”弟子壇前“という曲があり、仏教に関しては”南海観音賛“賛歌がある。

実際に泉州市内を巡った経験からも、非常に多くの各宗教寺社があり、そこで必ず参拝する信者に出会うので、社会主義国であることをしばし忘れさせるほどであった。また市の中心部に閩帝廟とイスラムモスクが並び建っている様を見ても、宗教間の関係にさほど対立がないことが想像された。また市内には“茶館”の様な館閣があり、夜になると弦友が集まって南音愛好の会を開く。調査団体在中にも宿泊したホテルの近くにこのような茶館があり見学する機会があった。最初はやや緊張した雰囲気だったが特に部外者を拒む様子もなく、やがて茶菓も振る舞われ極めて友好的な雰囲気となった。(写真18)



写真18 茶館の南音

南音の演奏技量を高めるため、また他の楽社との交流の為に行う二種類の公開演奏の形式が存在する。ひとつは「拜館」いまひとつは「拼館」という。

「拜館」は友好的な公開演奏で、適切な日を選んで相手の館閣を訪問し、互いに得意な曲目を演奏し親睦を深める目的のものである。

一方「拼館」は互いの技量を競い合うもので、やはり日時を定めるが、曲目を指定して優劣を競うものである。最初から相手に出来ない高度な曲が指定されることもある。これによって演奏者の技量だけでなくメンタリティも育成される。

5-4 南音の神、孟昶Meng Chang

五代十国時代の后蜀の王、孟昶は「孟府朗君」と呼ばれ、南音の祖先として崇められている。春分と秋分の年二回、南音愛好者団体によって盛大な祭祀が催される。南音藝苑の建物の最上階にはこの孟府朗君を祀る祭壇がある。(写真19)



写真19 孟府朗君

6 南音の海外に於ける発展

南音は閩南人の移住とともに東南アジアを中心に海外へ伝承した。それぞれの伝播地域では「南音」以外の名称が用いられている。「南管」は主に台湾で使用される名称で、近年はフィリピンでもこの名称が用いられる。「南楽」はアモイ、台湾、東南アジアの各地で使われている名称である。名称の違いだけで、音楽の内容は同質のものである。

海外の閩南人（華僑・華人）は南音を故

郷の音として認識し、移住地と祖国を結ぶ絆としている。19世紀半ば頃から多くの泉州地域の人々が東南アジアへ移住し、それに伴って南音も各地域にもたらされた。

『人類非物質文化遺産代表作名録「南音・泉州弦管」』の中には海外の南音活動団体、及び泉州南音楽社の海外での演奏活動を記録した写真が多数載せられている。その中には香港、マカオ、シンガポール、フィリピン、インドネシアなどの国で撮られた映像が見られる。

近年中国経済の発展にともない華僑・華人の社会的地位も向上したため、東南アジア各地でも南音楽社の活動がより活発化したといわれる。泉州との間の人的交流も盛んになり、代表団や先生の派遣が頻繁に行われるようになった。

南音の海外における伝承は華僑・華人の愛国心を喚起し、故郷の経済発展と南音伝承を推進することとなった。

むすびに

今回の泉州調査は民族音楽学専門の私にとって非常に意義深いものだった。特にユネスコ世界無形文化遺産に登録された伝統音楽「南音」を実際に鑑賞する機会を与えられたことは極めて幸運であった。残念ながら中国語を理解しない私としては、音楽の内容により踏み込んだインタビューは出来なかったが、帰国後日本語で書かれた文献等を検証することによって、南音の大まかな全体像を把握することは出来たと思う。

また泉州が東南アジアに在住する華僑・華人の出身地であり、南音もまた各地域に伝播していることはインドネシア音楽を専門とする私にとって今後の調査に大きな示唆を与えるものとなった。この調査結果が、今後インドネシアに於ける南音楽社の活動ならびに中国系住民の音楽文化について調査するための大きな手がかりになるものと

期待する。

注

- (1) 当日調査団に配布された『人類非物質文化遺産代表作名録「南音・泉州弦管」』中では「下四管」は打楽器群の総称であるように記述されている(33頁)。

<参考文献>

王維、「中国の伝統音楽「南音」及びその周辺」、『香川大学経済論叢』、第80巻、第2号、185-198頁、2007

王維、中国の伝統音楽「南音」及びその周辺(その2)、『香川大学経済論叢』、第80巻、第3号、231-254頁、2007

楊桂香、『台湾の南管』、白帝社、2004

Gong Wanquan(編)『人類非物質文化遺産代表作名録「南音・泉州弦管」』(発行所、出版年不明)

鄭長鈴／王珊、『南音』、浙江人民出版社、2005

王珊、『泉州南音』、福建人民出版社、2008